

会議名	繋ぎ飼い飼養における新酪農システム現地検討会
開催日時	平成 18 年 12 月 13 日（水） 13：30～16：00
開催場所	井頭温泉 チャットパレス 大研修室（栃木県真岡市下籠岡 4 1） および高橋牧場（栃木県真岡市堀内 1 8 3 - 2）
主催者	農研機構支援センター・新農機実用化促進(株)
参加人数(概数)	約 100 名（農林水産省、都道府県関係者（行政・普及・研究） J A 関係者、独法研究機関、生産者、農業団体関係者、企業関係者、報道関係者）
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>繋ぎ飼い飼養における新酪農システム実証試験では、飼養規模 50 頭程度の繋ぎ飼い牧場を対象に搾乳ユニット自動搬送装置や裁断型ロールベアラ等の繋プロ開発機を導入し、ふん尿処理・利用まで含めた一連の酪農システムとしての効果を民間牧場において実証している。</p> <p>この現地検討会では、新しく導入した繋プロ機の性能面から見たシステムの適合性や実用性を検討し、新酪農システムの開発推進及び円滑な導入に資することを目的にしている。</p> <p>下記により開催された現地検討会に出席して収集した情報を報告する。</p> <p>1) 挨拶：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（農研機構機械化促進担当理事）平成 15 年～18 年度に、3 つの装置を組み合わせた新しい繋ぎ飼いシステムの現地実証試験を 2 牧場で実施している。全国で裁断型ロールベアラは 100 台、キャリロボは 180 台導入されている。</li> <li>・（農水省農産振興課担当係長）農政の方向に沿った繋プロ事業の成果品の実証試験である。</li> </ul> <p>2) 概要説明</p> <p>(1) 「繋ぎ飼い飼養における新酪農システムの概要」 生研センター 畜産工学研究部長 道宗 直昭</p> <p>(2) 「導入した機械・装置の利用効果」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①細断型ロールベアラ 生研センター 主任研究員 志藤 博克</li> <li>②搾乳ユニット自動搬送装置 生研センター 主任研究員 平田 晃</li> <li>③固液分離装置等によるふん尿処理法 生研センター 主任研究員 原田 泰弘</li> </ul> <p>(3) 「新酪農システムの経営的評価」 畜産草地研究所担 山地畜産研究チーム 主任研究員 宮路 広武 ゆとりある酪農実現、飼料自給率向上、資源循環・有効利用を目的にしている。調査した導入事例（群馬県と栃木県の 2 牧場）において目的が達成されている。効果とコストの検討から、このシステム導入による追加費用は 6 年間で償却可能。農家の声として、精神的な余裕が生じ、1 人搾乳が可能で週休も取れるようになり酪農からのリタイアが 5 年は延びる。</p> <p>(4) 質疑・討議</p>

	<p>・コントラクターも視野に入れた次世代の自走式汎用型細断型ロールベールは平成 20 年度の市販を目指して耐久性などテスト中。</p> <p>3) 現地見学：高橋牧場</p> <p>・高橋牧場は、新築牛舎、39 頭。当初フリーストール牛舎も考えたが、個体能力（1 万キロ）維持のため繋ぎでキャリロボ導入。搾乳は夫人と娘（後継者）の担当で、交代で休みも取れる。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連課題名	<p>次世代搾乳システム；現在のキャリロボの機能向上のほか、IT 技術と動物愛護型乳牛管理方式を導入し超高能力乳牛（2 万 5 千キロ）に対応できる画期的な省力的、低価格のロボットシステムの総合的開発研究。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>特になし。</p>
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<p>参考資料の生研センター・新農機「緊プ農機のすべて」のパンフレットによれば、掲載されている農機の数水田用 24、野菜用 19、果樹用 3、畜産用 7（うち、ふん尿処理 5、草地・飼料用は 2）である。畜産現場では、搾乳ロボット、哺乳ロボットはじめ、高性能自動給餌や省力的家畜管理、生産物の品質管理・履歴記録のための機械や装置の需要は多いのであるから、既存のメーカーに拘らない企業の開発意欲や新規参入を誘導するような方策が必要と思われる。</p>
5. 会議の所感	<p>宇都宮から会場、会場から高橋牧場への移動は大型バス。途中の道路をはじめ車窓からの水田・畑地の基盤整備の高度化には今更ながら感動させられた。国民の資産であるこの公共投資を無駄にしないような農政の重要性を感じさせられた。</p>
報告者	<p>針生 程吉</p>